

書楼弔堂

しよろうとむらいどう

そうや

霜夜

探書拾玖 活字

〇〇七

探書廿 複製

〇八一

探書廿壹 蒐集

一六一

探書廿貳 永世

二三七

探書廿参 黎明

三一七

探書廿肆 誕生

四〇三

装幀

菊地信義

十水戸部功

組版

紺野慎一 高野智子

書楼弔堂

霜夜

活字

かつじ

探書拾玖

梅も桜も区別がつかない。

色も形も違うではないかと、そう謂われればそうなのだろうが、そもそもどちらもちゃんと見たことがないのであるから、比べようもないことである。

桜が綺麗だなと口にして、違うだろうと嗤われて、なら梅かと問えば桃だったことがある。何もかも区別がつかない。

町育ちだということもない。

育った在は山の中で、樹木はふんだんに生えていた。見回す限り至る処に生えているのだから厭でも目に入る。だからといって詳しくなるといふものでもない。

目には入るが、それが何か識らねば困るといふこともないのである。

童の頃は木登りでも何でもしたものだ、それが何の木か識らねば登れぬということもないだろう。幹の伸びようも木肌の質も葉の形状も、何もかも違っているのだろうとは思ひ、そういうものだと識ってもいるのだけれど、どう違うのかはどうでも好いのだ。

そうした事柄は何ら木登りの支障となるものではない。掴まり易く足場さえあれば、それで良いのである。木登りは樹木と慣れ親しむためにするものではない。登るといふ行為そのものが重要なのであり、何に登るかはどうでもいい。童はただただ高みを目指すのみなのである。況て到達した高所に如何なる花が咲いていようが、目に入るものではなからう。そう思うのだが、どうもそうでもないらしい。

見ずとも匂いが違うのだと謂う。まあ、それは解らぬでもないけれど、匂いなどというものはいつでも何処でも何かしら香っているものだから、気にしては始まらぬ。

不快な臭いというのであれば、それは厭なものではあるのだが、そうでないのならいちいちに懸けてなどいられるものかと思う。花の香はいずれも心地好いものであるから、差などなからう。

季節が違うだろうとも謂われたが、それも能く解らない。咲く順番があるということらしいが、幾日開いていようが春は春である。梅が春で桜が夏とかいうのならまだしも、高高半月ずれる程度であれば、然う違いはなからう。何かに感づいているうちに月など平気で替わってしまうものだ。

ずっと樹上を見上げて暮らしている訳ではないのだ。咲いたか散ったか気にしていなければ知れるものではない。

とはいうものの、そんなものは同じだと言ひ張るつもりなど毛頭ない。

ただ、鈍なのだ。

花を愛でるような品格が備わっていないだけなのである。

袖口に付いた花弁を見て、そんなことを考えてしまう。実にどうでも良いことである。

払い落として終いであろうに。

二度叩いたが、取れなかった。

糊でも塗ってあるかのように貼り付いている。仕方がないので指で抓んで剥がした。別にべたりと付いていた訳でもないから、何かの加減なのである。

多分——桜なのだ。

しかし桜だと断ずるようなことは、しない。

違っているかもしれないからである。思うだけであれば誰に咎められることもなからうに、それでも決め付けてしまうことは自重しようと思う。

桜と桃を取り違えた際、臍が宿替える程に嗤われた苦味が身に沁みているのである。

抓んだ花弁を棄てるべく指を放したが今度は人差指に付いて来る。何度か手を振って見えなくなつたので、それで良しとした。

見上げれば同じ色の花が咲いている。

満開なのか七分咲きなのか、それすらも判別が付かぬ。どれだけ植物に興味がないものかとおのれで呆れる。

綺麗だとは感じる。でも道行く人を呼び止めて、あれは桜なので御座いましょうかと問う訳にも行かぬから、見ぬようにした。

田舎者は桜も知らぬのかと思われる。

否、場合に依つては智慧が足りぬと判じられるかもしれない。

見知らぬ人に蔑まれてもどうということはないし、仮令どれだけ愚か者と判じたのだとしても、面と向かつて初対面の者を愚弄するような御仁も居らぬとは思うけれど、それでも己で己を劣等と判じてしまうような気がするのである。

だから花を見ないように努める。

上京の際、東京は生馬の眼を抜く凶い処であるから田舎者は重重注意をせねばならぬと、幾度も言われた。

言ったのは東京で暫く暮らしていたことがある伯父である。

御天気師だの邯鄲師だのいう詐欺泥棒が掃いて棄てる程に徘徊しているのだからお前の如き棕鳥は余程気を付けていないとただの一日で丸裸にされるぞと、伯父は耳に胼胝が出来る程に繰り返した。

邯鄲師というのは小難しい名前であるが、宿屋に泊まったりした際に、寝ている間に持ち物を盗む泥棒のことだそうである。要は枕探しである。そんなものは御一新の前からあるし、珍しいものではない。田舎にだって居る。

御天気師というのは道端で寄つて来る詐欺師なのだそうだ。今日は良いお天気で——などと気安く話し掛けて騙すらしい。枕探しは兎も角も、田舎在所で出合い頭に人を騙すような族は然う然う居るまい。概ね顔見知りなのである。他所者が馴れ馴れしく話し掛けて来たならばその段階で警戒しようというものである。人が多い帝都ならではの悪事ではあるのだ。

だが、手口を別にするならば、不心得な者は何処にでも居るのである。どんな田舎にだって居る。十人に一人不心得者が居るのだとして、百人居たら十人、千人居たら百人が不心得だということになる。それだけのことだと思う。

ただ伯父は、東京には悪人しか居ないようなことを言うのである。

そこまで記憶を巡らせて、ふと思ひ出した。

その時、棕鳥とは何のことだと問うたのだ。伯父はそんなことも識らぬのかと答えた。識らぬものは識らぬ。識らぬから尋いているのだと重ねて問うと、田舎者のことだと言う。何故田舎者が棕鳥なのかと更に重ねて問うと識らぬと言われた。識らぬのは伯父も一緒なのである。

結局、伯父も東京のことなど識らぬのである。暫く暮らしたというが、それは日露戦争の前のこと、しかも一年に満たぬ期間であるから、当てになるものではないのだ。

ただ、そうして脅されてばかりいたものだから東京というのはそれはもう大変な処なのかと思っていた。尻込みしつつ用心して上京したのだが、着いて暮らしてみても別に大きく変わりはなかった。

空が赤い訳でも鬼が棲んでいる訳でもない。

まあ、人が多くて建物が立派だというだけなのである。

それに東京といっても色色だ。この辺りになると人も少なく建物も古いから、郷里と殆ど変わりがない。畑もあるし樹木も多い。百姓家などは故郷よりも貧相である。

違うところといえば、ただ一つ、山がないということに尽きる。

故郷は山村で、そのうえ山に囲まれていた。東西南北に山があるので、何処を向こうが目に入る。山は形も高さも違うから、山並みで方角は直ぐに判る。

関東には山がない。

ない訳ではないのだけれど、見えない。

外に出る度、ああ平野に居るのだと実感する。

何処までも遠くが見える。

富士山まで見える。富士は日本一高い山なのだろうから見えても当然なのだろうけれど、それでもかなり遠いのだ。そんな遠くまで見通せるということは、延延と平らだということである。ならば富士を指標にすれば良いのかといえば、これは無理なのだ。場所に依っては見えはしないし、天候次第でも見えなくなる。

土地勘はまるでないし、建物も何が何だか判らない。

町名も馴染みはない。戸惑う一方である。

流石に下宿の周りは覚えたが、遠出をすると途端に判らなくなる。東に進んでいるつもりがいつの間にか南に向かっていたりする。考えてみれば道は真っ直ぐではないし、東西南北に通じている訳でもないのだから、道なりというのは方角とは無関係だということである。それでも道に沿って歩いていると真っ直ぐ進んでいるような気になるから、不思議なものである。

だからいつまでも到着しないのである。

町名は間違っていない。ただ目印も何もない。無駄に広くて半端な傾斜の、殺風景な坂道を進み、上り切っても結局何もないのだ。竹垣と庚申塔があっただけである。

それでも間違っていないと何故か確信し、既に坂も終わっているというのに先に進んだ。怪しいと思いついたのは結構経ってからで、見渡せばもう道も下り坂に変わっていたし、町名も変わっていたのである。

間違っていたのだ。

このまま行っただけでは取り返しがつかなくなると、来た道を引き返した。妙に横道に逸れたりと元に戻れなくなる気がしたから、また坂を下った。

何もない。畑だの雑木林だの、そんなものしかない。人家さえ疎らだ。

坂の途中には横道が幾つもあるのだが、どれも細い小石径である。目指す場所は通り沿いにはないのだ。何処かで横道に入らなければならないのだが、どう見てもそれらしい道はない。当て推量で一度曲がってみた。

片側は腰程もある藪で、片側は閑散とした畑だった。進む度に藪はどんどんと幅を利かせ始め、道幅は狭まって、大して進まないうちに径は途絶えてなくなってしまうた。

行き止まりには奇妙な大輪の花が咲いていて、まるで小莫迦にされているように思えたものである。行けないのだから引き返すよりない。

徒労というのはこういうことをいうのだろう。そして坂道まで出て気付く。

径は右側、と聞いて来たのである。

坂を下っていたのであるから、左側に入るべきだったのだ。それなのに、右に入ってしまったことになる。これはもう、田舎者だとか物識らずだとかいう問題ではない。ものを考えていないのである。

坂道まで戻り、今度は左側を気にして下った。路は幾筋かあったが、どれも似たようなものだった。同じ過ちを繰り返すのは癪だったから、路がある度に立ち止まって覗き込むようにしてみたのだけれど、曲がっているのか何なのか、少しも先が見えないのである。

袋小路の疑念はどうしても拭えず、気付けばもう坂下に着いてしまっている。

坂下は至って普通の町である。帝都然としている訳ではないが、故郷の村よりはずっと整然としている。家は小振りだが、密集して建っており、行き交う人の数も多い。

しかし目指す場所は町場にある訳ではないのである。踵を返して、坂を見上げる。何とも半端な坂である。

迎も億劫な気分になる。それ程の勾配ではないし、疲れる程の距離でもないのだが、そこがまた上る気を殺ぐのであった。険しい山道や急な石段の方が余程上る気になる。そうしたものは上り切った処に達成感が待っている。

この坂には何もない。

遣る気なく足を踏み出す。

そもそも、何を為に行くのかを把握していないのである。

十歩程歩いて立ち止まり、坂の先を見据える。店があるとは到底思えぬ寂寞とした景色である。空が白く抜けている所為かもしれぬ。背後に山並みが見えていたならば、もう少し落ち着くかもしれない。

こういうところは田舎者なのである。

東京は整然としていて、かつ紛乱しているものだと思ひ込んでいる。

田舎は渾沌としていて濃密だけれど、何処かが抜けている。街なのに抜けているのは、何だか落ち着かないのである。

今度は上りであるから、入る径は右手で良いのだ。

右ばかりちらちら見て進むから余計に落ち着かない。

ただ、右側の樹木はややこんもりとしていて、森のようでもある。処処に薄桃色の花が咲いている。いや、薄桃色ではない。あれを桜色と呼ぶのか。

——桜だ。

矢張り桜に違いない。

梅はもつと紅が強い。

何故だかそう思った。

歩けど歩けど一向にそれらしい横道は現れない。

建物もそれ程ない。しかも納屋のようなものばかりである。凡そ店舗があるとは思えない。下の町で尋いてみるべきだったかもしれないねとも思うけれども、尋いても無駄だというようなことを言われたようにも思う。人見知りになるのは、伯父の言葉も効いている。

朝早く下宿を出たというのに、既に午は過ぎている。町だか村だか判然としない、まるで見覚えのない落ち着かない場所を、上ったり下ったり、ただ漂流している。行き先も曖昧で、目的もあるようなないような、実にうかうかとした気分である。

何が何でも行き着かねばならぬということもなからう。急いでもいいない。そう思えば少し楽になる。ただ、朝餉も摂らずに出て来たし、歩き詰めではあったから、疲れてはいたのだ。

もう一度右に視軸を移すと、何やら奇異なものが目に飛び込んで来た。

幟旗である。

ただ、その前に男が立っているから何と書いてあるかは読み取れない。地味な旗である。いや、地味というより煤けているのだ。

舗——なのかもしれない。

既に一往復しているというのに、まるで気付かなかった。斯様に何も無い場所には舗などないという偏見を持っていたからか。東京の店舗はモダンで洒落ている、そうでなくとも小綺麗なものと思ひ込んでいる。もう一度凝眸してみる。

看板などはないが、矢張り店舗のようである。建物は未だ新しい。小振りだがどう見ても住居ではない。縁台のようなものまで出されている。造りからして休み処かと思ったので、近付いてみた。

何を売る店なのか確かめようとしても男が邪魔で幟の字が読めぬ。

更に近付くと男は振り向いた。同じくらいの齢であろうか。前掛けを締めているし、まあこの店の者なのだろう。

「おや何か」

「いや、此処は——」

「此処は、はあ、茶店、ですかねえ。甘酒汁粉、蒸し芋にお茶、団子も少々、お望みとあれば握り飯も御座んすよ」

「一服も出来ると」

「一服でも二服でも、幾らでも出来ましょうね」

男は人を紹介するかのように手で店を示した。